

然るに慶安の頃はい凶年豫よ至り青災並び起つて牛馬六畜倒死するもの其数をしらず、居民甚だ見倒の患を懐けり。

時に井原の郷吏其下民をひきいて、神前に詣り奉り、丹成つごを抽て是を禱ること七日、嗚呼神明疑うべからず、即、靈ありて告たまわく、汝等是より筑の後州御井郡千代島の中村と云う処に至て訊べし、彼処に希代の音楽あり。これをつたへ来たつて、吾神前において永代奏舞おん儼る事なくんば、國家安全たるべしと宣いおわつて、村吏驚き悟め、則ち相語て色色歡喜再拜して速に筑前におもむき、此音楽を請伝來つて神勅に任するもの也。抑此音楽と云は、人皇五十七代陽成天皇の御宇に、源性定たり、五十九代宇多天皇の御宇に平性立ち、両家代々帝都を守護したてまつる。

然る処、八十一代安徳天皇の御宇に至つて、源平両家の戦により、平氏源氏のために帝都を追散せられて、筑之前州太宰府に落行き、岩戸原田等をかたらい、筑後高野の本庄に発向し、小瀬川を隔てて、緒方の維義と戦い、維義の武略を以て、数千の牛を集め、両の角に明松をともし、山中に向て深更に追放つ。

平氏軍兵此謀慮に驚き、周章小瀬川に追つめられ、大半打ちこざる。其の時の大將はじめ一門の君達先帝を守護し奉り、箱崎より御船にめされ、空しく落ゆきたまいてけり。

其後摂州一ノ谷、讃州八島、豊州柳浦の戦いに敗軍し、長州赤間関の沖にして、先帝を始め上り、平家の一族悉入水し玉い源家一統の御世となりおはんぬ。

されば彼小瀬川戦死の亡魂、河伯水神と成て、やもすれば現し出て、音楽を奏し舞遊ぶといえども、悪風処々に起て、牛馬に災をなすこと甚し。四民これをかなしみしばしば、法に依て彼水神に祈る。時に水神感慮あ

つて、潜ひそに幻出し相告て云く、今よりして、ねんごろに祭礼の儀を調へ 此音楽を奏しなば、彼災あるべからずとて、一一に此曲調を授けおわんぬ。

居民甚だ奇異の思ひをなし、すなわち、教に従て此音楽を奏し、始めて神慮を安んじ上る。このとしより以來、凶災共に退き、家園自ら豊にして、四民静平を樂む事、恰も義皇の天に等し。嗚呼噫嘻音楽の徳たる事至て尊し。其の曲、黄鐘調こを起、其巧伶偏が手を欺くに至ては、豈、物の比すべきあらんや、因て以て此を不朽に記するもの也。

慶安三丙辰弥生日

千時元治紀元 秋八月中旬改写之

井原住

小野圓藏

道継

### (ウ) 耶馬溪神楽

豊前神楽とは、豊前の各地におこなわれている神楽の総称で、耶馬溪神楽をふくめ、その社数は豊前地内にやぐ二〇社、その他を加えると二四社とされている。

その起原は、「能」を母胎として、室町末期の元龜年間(一五七〇頃)、中津若狭宮の祠官、植野土佐守藤原外

記が、伊勢の神人から伝承した神人によるかぐらを庶民的に改変したもので、実に勇壮活発、しかも甚だ神秘的であることが特色であると、「植野文書」豊前神楽の由来は記している。

豊前神楽の番付は次の通りである。

- 一、岩戸神楽 一八番
- 二、神坂神楽 三三番
- 三、湯立神楽 三三番
- 四、年間神楽 三三番

明治になって、三口、鶴市神社の神官川江賢三より、佐知の佐助が習得、佐知の神楽組を作ったことから、次第に下毛郡内にひろまっていったという。

本町、耶馬溪神楽の発祥は、今から約百年ばかり前の、明治二十年代で当時、大字東谷の屋成太三吉(昭和十一年・八十一才で死去)という宮大工の棟梁か、たまたま下郷村へ宮普請に行った時、その土地の神楽社が廢絶状態になっていたのを惜み、神楽面・衣装その他笛・太鼓など一切を譲りうけて東谷へ持ちかえり、建築関係の大工・左官・石工などの職人による神楽社を設立、中津市植野の宮司、秋満貞氏の指導をうけ、今日まで一〇〇年伝承の基を礎いた。

この間、神楽社連中の経済的内紛から一時解散のやむなきに至ったことから、主宰者の屋成太三吉は、神楽保存のため、娘婿である屋成勘蔵(大字東屋形の宮大工)に、この神楽を継承してもらうことにし、その指導にあたった。神楽社の構成は、東谷と同様、大工・左官・石工などの職人によって組まれたが、社人は七所神社の氏子であることを条件とした。

神楽社の評判は大変よく、有名な神楽舞も続出するが、昭和に入り、戦争、経済の高度成長などの影響から、一時は、この社も休止の状態に追いこまれる。

苦境の中から、梅野輝夫氏が中心となり、再建に努力、庄内町より神楽舞を招へいするなどして、昭和四十九年保存会が生まれ、さきの東谷神楽社の人と、東屋形の一部の人が合併して、耶馬溪神楽の伝統を保存することになった。

一方、西谷にも、昭和のはじめ頃、小野良男氏を中心とする神楽座があった。

最近では、保存会、町当局、その他の後継者によって、本耶馬溪神楽社も、内容の充実と共に、演技、その他大いに向上、往年の活気を凌ぐ充実をとげた。

よろこばしいことは、本神楽社の充実発展に歩調を合わせ、東谷において子供神楽の活動が、昭和五十年頃から本格化したことで、赤間神宮へ四回、緒方町へ三回、NHK全国放送二回と、多彩な活動をくりひろげ、神楽後継者が力強く育っている。

- 耶馬溪神楽保存会会長 梅野輝夫
- 耶馬溪神楽社社長 東谷 藤野富夫
- 社中 東谷 高野大蔵 小野利夫
- 小野雪城 竹本喜好
- 藤野正幸 大石一美

屋形 木本弘吉 桑津留武夫

上永利彦 平野 新

第二節 口 碑・伝 承

一 伝 説

(1) 矢山比古

屋形

「矢山」の名称の起源については、神功皇后三韓征伐のとき、矢竹を取ったから矢山というとか、またその山容が八方面から見ておなじようだから八山というとか、また屋根のような形をしているから屋山というとか、色々説明されるが、とにかく、中津平野の南方に美しい山容を見せている山である。

この山の麓の三口あたりまでは、大古は海につづいていた。

その頃、矢山附近には狩猟民の一族が住んでいて、首長を矢山比古といい、まだ二十一・二才の若さながら、筋骨たくましく凛々しい顔だちの好青年であった。

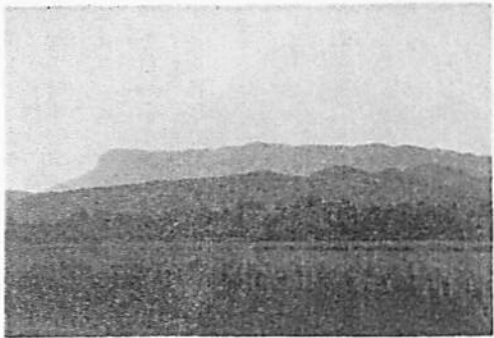
また佐知の海辺には、漁獵民が別の生活をいとなんでおり、両者のあいだには全く連絡はなかった。

ある日、矢山比古は、一人弓矢を携えて狩猟に出かけた。一匹の鹿を見つけ、見事一矢を射かけたが、急所を

それたとみえ、弱りながらも遁げ続けた。矢山比古は、それを追い佐知の海岸へ出た。逃げ場を失った鹿は、山国川へとびこんだ。

川岸まできた矢山比古は、ふと異様なものを発見した。川の中から出ている石の上に、人形かたまがう美人が臥しているではないか。

矢山比古が目をつめた途端、人魚は、ざぶっと水中にとびこみ、岸へ泳ぎつくと、矢山比古の目の前を、裳をひきずって去って行った。



中津地方から望む矢山

「ああ待って下さいお姫さん。お尋ねしたいことが」

矢山比古が声をかけると、

「私に?…」と人魚はふり返った。

「あなたはどなたの姫さんで、またお名前は?」

「海人の長、魚名の娘で幸姫(佐知)ひめです」

二人は、はじめて、じっと顔とおおを見つめ合わせた。

魂のふれ合いを感じた二人は、そのことがあってから、どちらからともなく、野辺で語らうようになった。

ある日、魚名があぜ倉で漁具の点検をしていると、若ものたちがあわただしくやってきて、「首(かみ)さま、申し上げることがあります」

「なんだ、騒ごうしい」

て、本巻の欠を補うべき其の意味の「本耶馬溪町史」の生まれることを期待したい。

尚、本耶馬溪町史の資料収集に特に御協力をいただいた方々は左記のとおりである。

巻末に列記して、そのご厚志に報いたい。

(順不同)

(町内)

屋成敏雄 鎌川内忠 樋田彦太郎 小川治迪

伊東真純 田中昭一 新田政太郎 高橋 豊

高橋作術(御祖神社) 小野正 雲 西谷上組老人クラブ

梅野輝夫 角野不二夫 東谷上組老人クラブ

(町外)

渡辺信幸(豊前市) 嶋 通夫・今永正樹(以上中津市)

大隈米腸(安心院町)

昭和六十二年二月

本耶馬溪町史刊行会編集委員

本耶馬溪町史

昭和六十二年三月二十日印刷

昭和六十二年三月二十五日発行

編集者 本耶馬溪町史刊行会

発行者 本耶馬溪町

代表 町長横井 泉

印刷 佐伯印刷株式会社

大分市古国府十一組

電話大分(〇五五)四二二二一